

あの日の弱音も未来への学び

第50回白門祭 実行委奮闘記

文&写真

学生記者

内藤伊音 (商学部2年)

白門祭実行委員会として、11月2日の前夜祭から始まる5日間のため、この1年間、準備を進めてきた。

実行委のメンバーは総勢約160人。2年生が中心となる。昨年とは比べ物にならないほどの仕事量を抱えた。直前1カ月は怒涛の日々だった。

私はこれまで、物事には積極的に取り組むタイプであり、何かしらの役割を任されること自体は慣れているはずだった。が、こんなにも慌ただしく、それでいて長く、辛い日々は初めてだったように思う。

今年で50周年という記念すべき白門祭。任されたのは、その記念企画だった。

企画は二つ。一つは過去49回の白門祭と今回の写真を集めて巨大なモザイクアートを作る。学生からの応募写真は6804枚に及んだ。

もう一つはウォークラリー。来場者が校内の写真撮影スポットを回って写真を撮ると、豪華景品が当たる福引券をプレゼント。

二つとも前例のない全く新しい企画である。担当者は25人いたが、こぞって右も左も分からず、予算内で立案するとの条件下、もがきながら進めていくしかなかった。

同時に、ほかの企画のパートナーなどを受け持った。

私にはさらにもう一つ、大きな仕事があった。所属しているテニスサークルの白門祭・出店準備だ。

来場者がスタッフ有志の顔にパイを投げる「パイ投げレポリューション」と「ごま団子」の販売。どちらも創設期から続けてきた。

100人ほどのメンバーの中で副会長に就任した。最初の大きな仕事が伝統の出店である。出店に必要な書類を準備する、説明会へ出席する。諸々の手続きから期間中のシフトづくりや買い出しまで。二つの50回記念企画案などを筆頭にやるべきことは想像の何倍も積み重なった。

朝起きてから、夜眠るまで、頭の中はずっと白門祭のことでいっぱいだった。徹夜をする日もあった。

夏休み前までは直前になって慌てないように、と進められるだけ進めておいたはずの準備だったが、直前になればなるほど、することはどんどん増えていく。

どれだけこなしても私の手帳に書いた『ToDo リスト』の数は減るどころか増えていく。「もう間に合わない」と泣き言をいう日もあった。不安ばかりが募っていった。息もつけない、常に何かに追われている。

そんなときに助けてくれたのは、いつも友人たちだった。話をよ



白門祭の最後を飾るグランドフィナーレで上がる花火。中央ステージの横で業務をしながらもなんとか見ることができた。

く聴いてくれた。私では思いつかないアイデアを示してくれる。切羽詰まって、どうしようもないときは一緒に作業までしてくれた。

仲間の支えがどれだけ偉大であるか。身に染みて感じた。感謝の気持ちでいっぱいだ。

第50回白門祭が終わった今、思い返すと多くの反省が思い浮かんで苦しくなる。だが同時にたくさん学びを得た。

自分のキャパシティの範囲。新しいことを始めるとき、固めておくべきことは何なのか。するべきことを思いついたら、すぐにメモを取る。人にものを頼むときの頼み方、お願いの仕方。そして、友人の存在の大きさ。これ以外にも挙げればきりがなほどの学びがあった。

大変だったが、社会人となる前にこうした経験ができたことは、むしろラッキーなことではないかと思う。

今回学んだこと、経験したすべてのことは、未来の自分のためになる。白門祭で大きな財産を得たと信じている。



使ってきた手帳やノート、資料など